

大阪平野の中部、大阪市の東南部に隣接する八尾市は、約二十七万の人口のうち六七〇〇人が外国籍住民である。これは市人口の二・五パーセントで、全国の平均値一・七パーセントを上まわっており、外国人市民の集住度も比較的高い。

その八尾市で一九七四年、トッカビは日本で生まれ育った在日コリアンの子どもたちが、差別に負けず、自分の豊かなルーツを肯定的に受けとめながら生きられる社会をめざして活動を開始した。それまで外国籍の九〇パーセント以上は韓国・朝鮮籍者であったが、一九九〇年代に入ると多民族化が進行し、国籍別に見ると、中国約一五〇〇人、ベトナム約八五〇人が占めるまでになった。それとともに、トッカビの活動もさまざまな外国人市民を対象とする方向へ広がってきている。

とりわけ、八尾市には大阪府内で一番ベトナム人が多いという特徴がある。一九七五年のベトナム戦争終結以後、難民としてわたって来た人たちが、定住促進センターで過ごした後、市内三カ所にある「雇用促進住宅」とその周辺に居住し始め、徐々にコミュニティとしての広がりを見せるようになってきた。そしてトッカビには、日本語に不自由なベトナム人から相談が多く寄せられるようになった。二〇〇四年、ベトナム語で対応できるスタッフを置いてからは、「病院へついて来てほしい」「保育所に子どもを入れたい」「市役所から届いた郵便が」何か教えてほしい」等々、相談件数は急激に増えていくことになった。

ム人会」というベトナム人コミュニティ組織（一九九八年設立）があり、三年前から中秋節を九月に開催している。そこで二人が中心となって、ベトナムの民話をベトナム語で披露したのだ。しっかりと話すベトナム語に驚いたベトナム人保護者が、自分の子どもも通わせ始め、今ではベトナム語教室の生徒獲得に一役買ってこれている。

今二人は、ベトナム語の紙芝居作りにとりかかっている。ベトナムルーツの子どもの多い小学校や保育所などで、ベトナム語にふれてもらうために読み聞かせをしてみたいという。二人は、ベトナム語など語学力を身につけ、将来は国をこえて活躍することを夢見ている。

自分のルーツを語れる社会

そんな二人だが、出自に関して悩みがなかったわけではない。ティさんは、中学校入学時から日本名を用い、まわりには自分を日本人だと言っていたという。「ベトナム人だからいじめられたらどうしよう」という不安があったからである。事実ホアさんは学校で「お前は、ベトナム人」と言われたことがある。今では周囲の理解もあったことでその不安もなくなりベトナム人であることを隠さない。

しかし、このような経験や思いを抱くのは二人に限ったことではない。ベトナム名をもじられたり、ベトナムへ帰れと言われたりして、ベトナム人であることを嫌だと感じている子は少なくない。そこで日本名を名乗り、ベトナム人であることがわからないようにふるまう。これは、これまで在日コリアンの子どもたちがたどった歴史とまったく同じだ。

多文化を
ささえる
人びと

当たり前に語れる社会を作りたい ベトナムルーツの子どもたちとのかかわりから

大阪府八尾市で在日コリアンを支えるために活動を始めた特定非営利活動法人トッカビ。

その名は朝鮮の民衆のなかで親しまれ、育まれてきた空想動物「トッカビ」に由来する。

地域の多民族化に伴い、さまざまな相談を受けるようになったが、彼らの悩みには国籍にかかわらず共通点が見られる。

在日コリアンへの支援から学んだ経験がここでは引き継がれている。

パク ヤンヘン
朴 洋幸

特定非営利活動法人トッカビ代表

ベトナム語教室の開講——保護者の願い
こうしたなか、あるときベトナム語を忘れていく子どもとの意思の疎通に悩む親から、子どもにベトナム語を教えてもらえるところがないだろうかと相談をもちかけられた。ベトナム語が第一言語である親のもとに生まれた子どもたちでも、日本語社会のなかで次第に日本語が主流になる。幼少時たとえベトナム語能力があった子どもも、年齢が進むにつれ、ベトナム語を忘れてしまうといったことも少なくない。そこでトッカビでは保護者の要望に応えるために、二〇〇四年度から毎週土曜日ベトナム人教師をむかえベトナム語教室を開講した。これは現在も続いているが、その様子ですこしのぞいてみよう。

開講当初、六歳だったホアさん（現在中学一年生）は、「ずっと日本にいたらベトナム語を忘れるから」という母親の心配が動機となって参加するようになった。ホアさん同様、開講当初から通うティさん（現在中学三年生）は、「教室が」ベトナム人を受け入れてくれてるんだなあと思う」と話す。教室に通うようになってから家族での会話が増え、「こんなことばを知っているのか」と驚かれたり、自分がわからないことを両親が話していると「それってどんな意味？」と尋ねるようにもなったという。ベトナム語教室が、単に言語能力を高めることだけでなく、同じベトナム人の「居場所」をめざしてきたことが現在につながっているのかもしれない。

ベトナム語教室の活力は今、ホアさんとティさんに負うところが大きい。八尾には「八尾ベトナム人」は、今まで、コリアンの子どもたちが同じ立場で集う場を通じて、コリアンであることへの自信と肯定感を育ませてきたが、同時にコリアンであることを理由に、進路や就労から排除しようとする社会へも働きかけてきた。このような運動はベトナムの子どもたちにも必要なことだと感じている。「日本国籍になっても、自分のルーツがベトナムにあることは言っていきたい」とティさんが言うように、子どもたちが外国にルーツをもつことを隠さず、当たり前で語れる社会の実現を願わずにはられない。



紙芝居作りの様子。アイデアを出し合うティさん、ホアさん

日本語café。比較的、日本語理解が進んでいる人たちを対象として、お茶を楽しみながらゲームやお話をして日本語を学ぶ。毎月1回開催（2011年7月15日）



八尾国際交流野遊祭。出会い・交流・共生をキャッチフレーズに、毎年10月に開催。コミュニティのベトナムや中国等の外国人が舞台や出店で活躍している（2010年10月30日）

ベトナム語教室に通う仲間の関係性を深めるための交流会（2008年7月26日）

